

# 大島 勲 作品の考察について

調査研究係 黒田 保臣

調査研究係として、今回は、創元会と深い関わりのある画家、元創元会常任委員大島勲先生の作品を取り上げて、その画業について考察したいと思う。

なお、今回の考察にあたっては、1992年5月1日に刊行された画集「Isao Ohshima 1916—1991」(Isao Ohshima 刊行会)を資料として参考にさせていただき大変ありがたかった。

また、今回の調査研究は、上記の画集に収録されている大島勲「人と作品」—大島勲その芸術の軌跡—太田将勝氏著を一部参考させていただきより内容が深まった。

大島勲は、大正5年(1916)6月1日岡山県倉敷市玉島で米穀商を営んでいた父林吉の四男として生を受けている。

昭和9年(1934)18歳で金光中学を卒業後上京し、川端画学校に入学しデッサンを中心に画技を磨くかたわら、青地秀太郎らとの交友が始まる。

昭和11年(1936)東京美術学校図画師範科に入学、在学中、同校教授伊原宇三郎、南薫造の薫陶を受ける。

昭和14年(1939)3月東京美術学校図画師範科を卒業後、熊本、愛知の県立中学校で教鞭を執った。この間兵役を挟み、戦後は昭和24年(1949)岡山大学が創設され岡山師範学校は、同大学に包括されて、大島は、翌年に岡山大学教育学部講師を兼務することとなる。

この年、第9回創元展(東京都美術館)に「水門」を初出品している。岡山大学には、30年余在勤、その在職期間中、創元会に所属し、岡山支部長、同会常任委員を歴任した。岡山洋画界を主導する日展系の有力画家として知られるに至る。

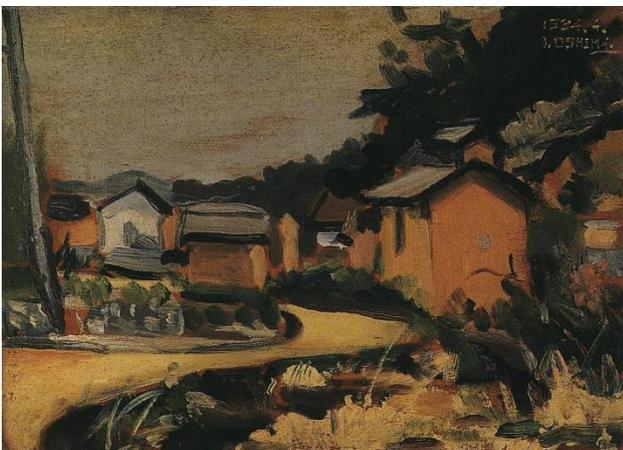
平成3年(1991)3月75才で逝去するまで創元会に所属し、画家として、また数多くの教え子を送り出した教育者として、存分な功績を残したことは、周知のとおりである。

数多く描かれた作品の中から、紙面の都合上、年代を追って代表的作品に絞って紹介してゆきたいと思う。

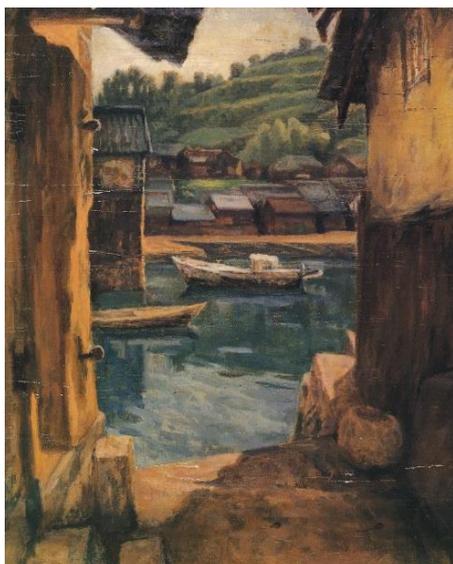
## 初期の作品

昭和9年(1934)頃～昭和24年(1949)頃

この作品が制作された時期は、中学卒業時に描かれたもので、長閑な農村風景が生き生きと的確な筆致でキャンバスに表現されている。作風には、野獣派のブラマンクを連想させるものが感じられる。

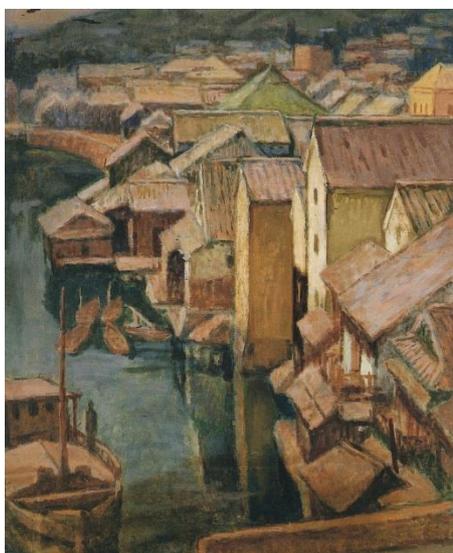


図版1 「農村風景」1934年



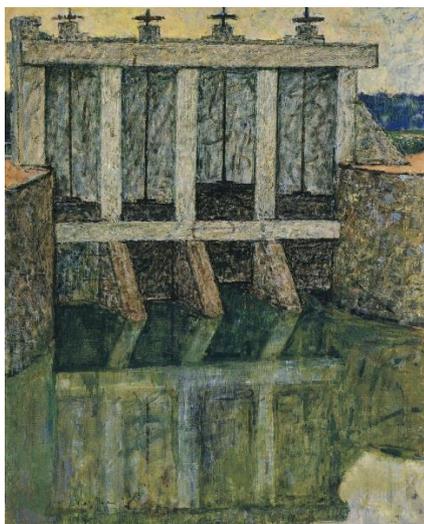
図版 2 「水郷（玉島）」

昭和 20 年代はじめ頃に描かれたこの作品は、当時の玉島の情景、土蔵造りの建物から見通し、運河にたたずむ小舟を描いたものである。作品からは画面構成、光線の扱い、筆致力の確かさ等が、今後の作品制作を予期させる優れた作品である。



図版 3 「港町（玉島）」

同時期に描かれたであろうこの作品も土俗的な作風を受け継ぎながら、ヨーロッパ的な格調を持った作風が感じられる。又、画面構成的な要素も取り入れながら、ひとつの試行の時期とも捉えることができると言えよう。



図版 4 「水門」 1950 年

### 画面構成的作品

昭和 25 年(1950)頃～昭和 36 年(1961)頃

第 9 回創元展出品作の「水門」は、以前から取り組んでいる画面構成要素を更に「水門」の作品の中に取り入れた優れた作品である。四つの堰をもつ水門と水面に映る陰影を取り入れて、変化ある作品に仕上げている。



図版5「水郷」1951年

「水門」の翌年に制作され第7回日展出品された「水郷」の作風も変化ある画面構成を取り入れ、無機質の堰と水面の表現が生かされた優れた作品である。

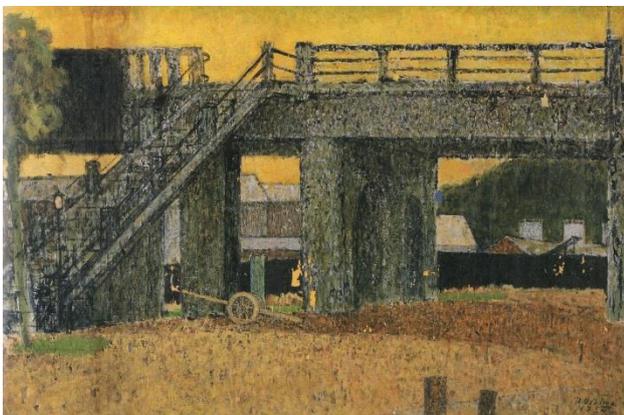
画面から大島芸術の人柄が滲み出た作品が伺われる。



図版6「ボイラー工場」

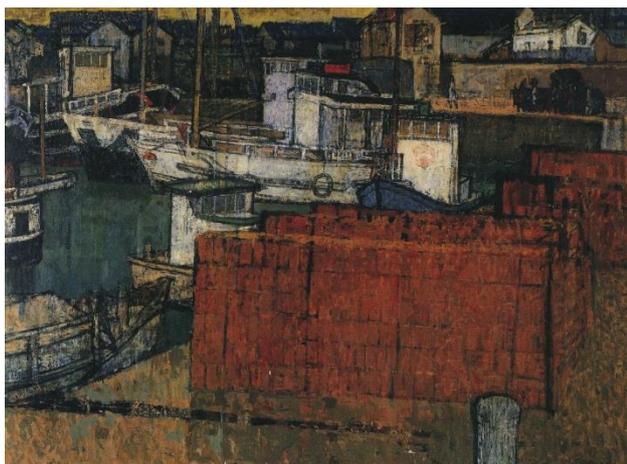
この頃より、作品のモチーフとして変電所、ボイラー工場がシリーズとして登場してくる。

各画面に黒いタンク、無機質な建物が表現されて、より力強い画面構成が構築されている。



図版7「陸橋A」1954年

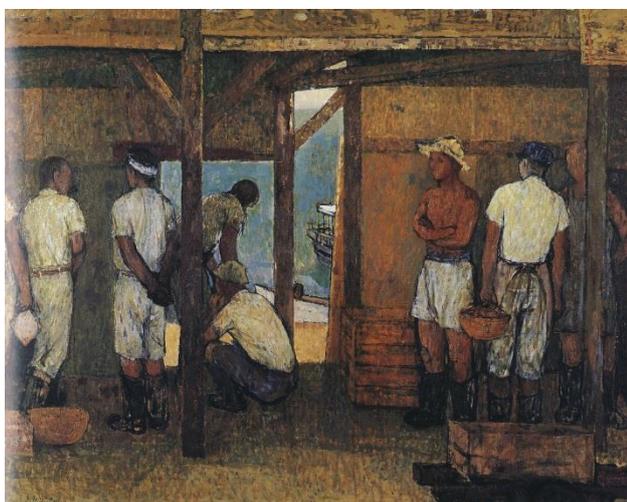
第13回創元展に出品された「陸橋A」は、変電所シリーズから岡山駅近郊の陸橋をモチーフとして、色調も大島調でまとめられて、直線的な画面構成で、今後の大島芸術の「樹木」シリーズへと展開する注目される作品である。



図版8 「碇船」 1955年

昭和30年頃より以前初期に描かれていた、玉島港、魚市場風景が登場してくる。

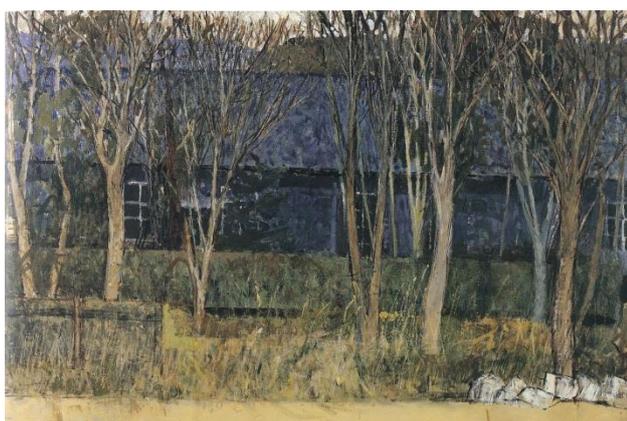
第11回日展に出品された「碇船」は、近景の赤い漁網と中景の白い漁船との絶妙のバランスで大島作品のセンスの良さが光っている。



図版9 「魚市場」 1956年

第12回日展出品作「魚市場」は、従来のボイラー、水門、玉島漁港、陸橋風景から市場で働く群像をモチーフとしてとりあげている。

又「魚市場」風景は、人物の表情は、殆ど読みとれず、人物の動きによって画面構成を図っていることが、作品から伝わってくる。

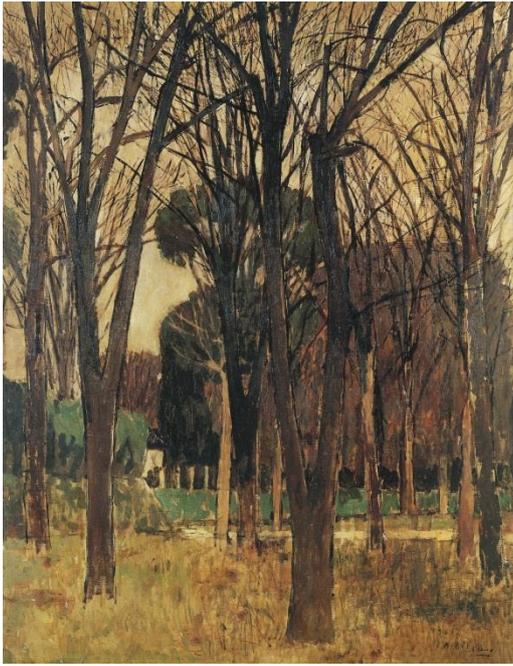


図版10 「樹」 1957年

大島作品で「樹木」シリーズが本格的に展開されてくる時期が、1957年頃である。

第16回創元展に出品された作品「樹」は、早春の岡山大学構内の樹木風景である。

水平線と垂直線との画面構成を樹木の配置で、作品構成を実験的に試みている。

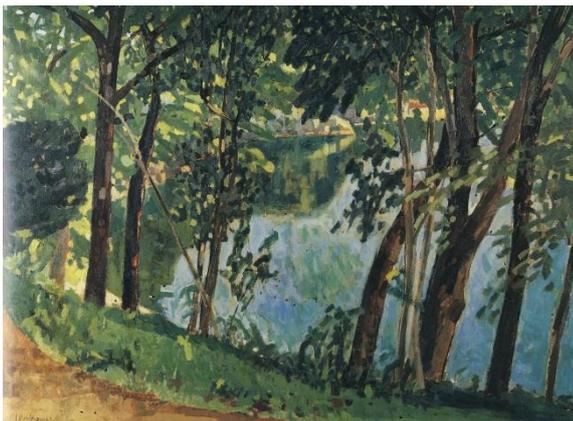


図版 11 「裸木」 1960 年

大島作品の画業を確立した作品と言っても過言ではない作品「裸木」。

いずれも天に向かって伸びる樹木の圧倒的存在感と空間処理、温もりのある色彩。

晩年まで制作された「樹木」の代表作品である。



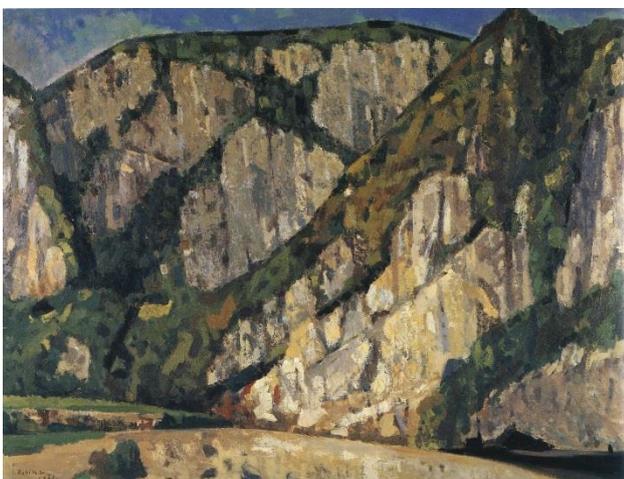
図版 12 「河畔」 1962 年

### 大島作品の確立期

昭和 37 年(1962)頃～昭和 46 年(1971)頃

昭和 37 年制作の「河畔」は、樹間から岡山市内を流れる旭川を見通した作品である。

大島作品のテーマである樹間シリーズで、空間処理と的確な色彩表現により河畔風景が見事に表現されている。



図版 13 「岩山」 1963 年

第 6 回日展に出品された「岩山」は、今後「早春の山峡」1967 年第 26 回創元展、「瀬戸内の山」1969 年改組第 1 回日展へと構成的要素を山容の中に希求してゆく試みが強く伝わってくる。



図版 14 「かき割り」 1971 年

第 30 回創元展に出品された「かき割り」は、漁港で水揚げされた牡蠣の貝殻を剥いて、作業している様子が、生き生きと画面に表現されている。ただの人物描写に終わらずに画面から漁港の生活感及び漁港の雰囲気醸し出されている秀作である。

### 集大成の時期

昭和 47 年(1972)頃～昭和 56 年(1981) 頃

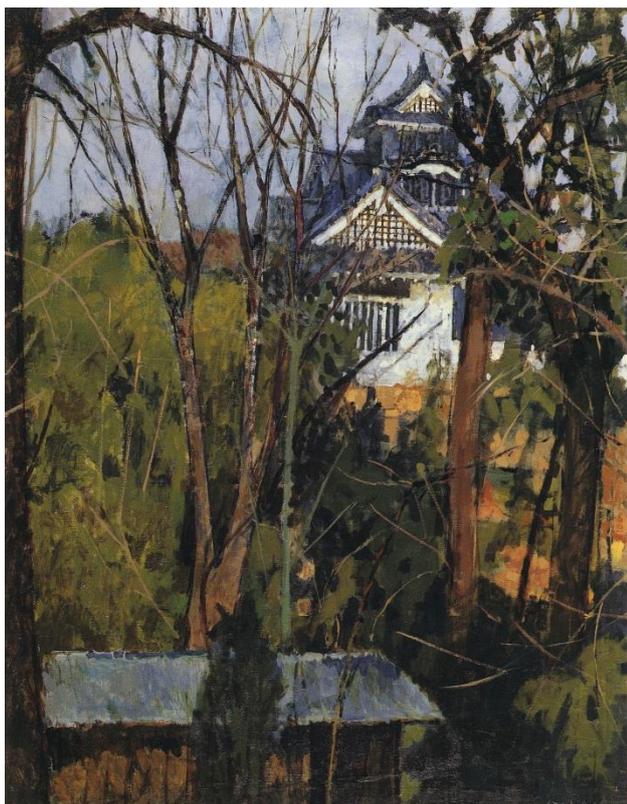


図版 15 「春を待つ」 1972 年

昭和 47 年頃から岡山大学キャンパスの早春の樹間シリーズがスタートする。

第 31 回創元展出品の「春を待つ」は、近景の枯れ草、中景の樹木が見事に画面構成されて、今まで考察してきた、大島作品の集大成として、位置づける事といえよう。

また、色調も温もりのあるパルルで、見る人に感動を与えてくれる。



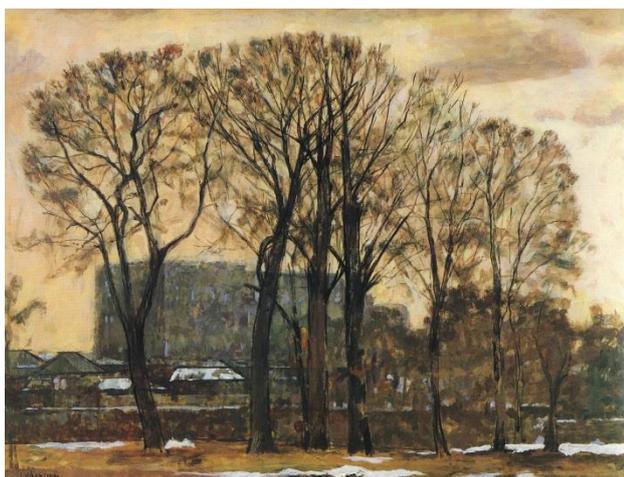
図版 16 「城の見える風景' 79」 1979 年

1979 年制作の「城の見える風景' 79」は、後楽園近くの鳥城を樹間から見通して制作されている。

樹木の枝を巧みに画面に取り入れて、お城をポイントに緊張感のある作品となっている。城と樹木との作品は、何点か連作されている。

## 晩期

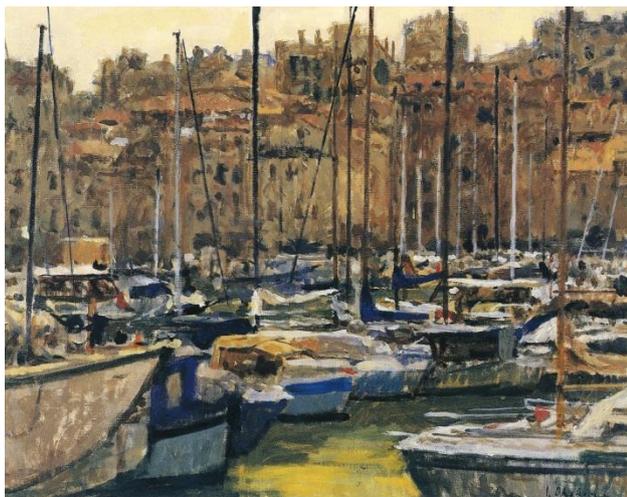
昭和 57 年(1982)頃～平成 2 年(1990)頃



図版 17 「残雪」 1984 年

1984 年第 43 回創元展に出品された「残雪」は、岡山市内の後楽園近くから市内を制作している。

所どころに残る雪が、画面全体に効果的に表現され温もりの中にも、空気感までもが鑑賞者に伝わってくる傑作である。



図版 18 「ヨットハーバーA」 1988年

1988年の草醒展に出品された「ヨットハーバーA」は、ヨーロッパを取材旅行した時の作品である。

異国の港風景を大島調で制作し、完成度の高いヨットハーバーが表現されている。

## おわりに

今回大島勲作品について、研究調査する機会に恵まれましたことは、大変ではありましたが、大変有意義なことでありました。

特に、先生の生い立ちから晩年までの画業を詳しく振り返ることができ大変勉強になりました。

先生が日ごろから言っていた言葉「作家は、自分に対していつもノルマをかけて、日々こつこつと制作に励むことが大切である。」が今でも頭の中に残っている。

現場主義を一生通された先生の姿が走馬燈のように蘇ってきます。

特に、創元会岡山支部を背負って、後進の指導にあられた姿勢には、感銘いたしました。

尚、一部敬称は、略させていただきました。

最後になりましたが、冒頭でもご紹介いたしました今回考察にあたっての画集「Isao Ohshima 1916—1991」を編纂刊行にあられました小川尊一先生に改めて厚く御礼申し上げます。

出典 「Isao Ohshima 1916—1991」

発行者 「Isao Ohshima 刊行会」

小川 尊一方

1992年5月1日発行